

県立長野図書館との交流研修について

— 長野県の「知」をつなぐ図書館へ —

澤 木 恵 (信州大学附属図書館中央図書館)
 吉 澤 明 莉 (信州大学附属図書館工学部図書館)
 鈴木 映梨香 (信州大学附属図書館繊維学部図書館)

1. はじめに

県立長野図書館（以下、県立図書館）と信州大学附属図書館（以下、当館）では、2015年8月に締結された「信州大学附属図書館と県立長野図書館との連携に関する覚書」に基づき、様々な連携・協力事業を行っている。

その一つに、覚書の「職員の研修・相互交流に関すること」を根拠に、相互に職員を派遣し、双方の図書館業務を現場で体験する「交流研修」がある。この研修は2016年度から行われ、4回目となる今回は、2023年7月から12月にかけて実施された。

本稿では、当館参加者（以下、筆者）が今回の交流研修で得た知見について報告する。県立図書館参加者の報告については、本号掲載の別稿¹⁾を参照されたい。

2. 研修の概要

県立図書館は、長野県唯一の県立の図書館で、信州大学（以下、本学）工学部近くの長野県若里公園（長野市）内に位置している。1929年に信濃図書館²⁾の蔵書を引継いで開館し、1979年に現所在地である長野市若里に移転、2018年から2019年にかけて館内をリニューアルし、「信州・学び創造ラボ」（以下、学び創造ラボ）を開設³⁾した。また、リニューアル後の児童図書室では立地を活かした利用者向けプログラムも提供している。

県立図書館では、ミッション・ビジョンを「共知・共創の広場」として、使命、展望、行動指針および行動計画を掲げている⁴⁾。筆者は、初日に森県立図書館長（以下、森館長）よりこれらのミッション・ビジョンとそれに基づく取組の説明を受けた上で派遣期間の4日間を過ごした。派遣期間中には多数の職員と関わる機会があったが、職位を問わず、県立図書館の職員全体にミッション・ビジョンがしっかりと浸透し、各業務・活動の土台として根付

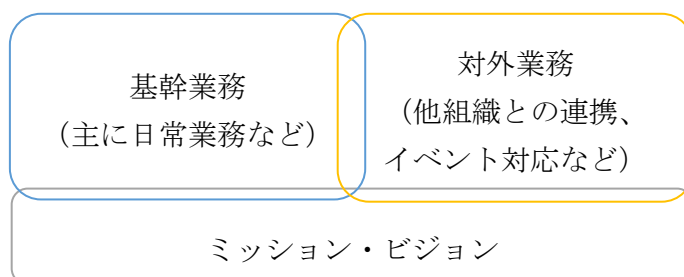


図1 筆者から見た、県立図書館の業務・活動とミッション・ビジョンの関係

いている印象を受けた（図1）。

今回の交流研修では、県立図書館の業務についての説明を受けたり、期間中に開催された研修やイベントに参加したりしたほか、一部の業務を実際に体験する機会もあった。4日間のプログラムは表1のとおりである。前半（7月）・後半（10月）ともに、おおまかに1日目は県立図書館としてのサービスや運営に直接関わる「基幹業務」に、2日目は基幹業務によって蓄積された「知」を生かして行われる他組織との連携やイベント対応などの「対外業務」に、それぞれ関わる機会が設けられていた。当日の状況に合わせて柔軟に対応してくださった部分（表1のうち、灰色の箇所）もあり、当初の予定以上に充実した日程となった。

表1. 研修プログラム

	7月4日（火）	7月5日（水）	10月25日（水）	10月26日（木）
午前	研修ミーティング	[館内見学]	対外業務 ・ 広報・関係団体事務 ・ 広報体制	[館内レファレンス研修（定例）] ・ 見学
	県立図書館について ・ 館内見学 ・ 県立図書館の取組			林業士入門講座 ・ 成果プレ発表会場の設営
	市町村図書館・公民館図書室 ・ 県内図書館の状況概観 ・ 市町村訪問	レファレンス実習 ・ 長野県公共図書館初任職員研修会に参加	司書会議（定例） ・ 業務紹介 ・ 定例会議陪席	[デジとしょ信州] ・ 利用動向
カウンター業務 ・ 児童図書室の案内 ・ 体験	情報リテラシープログラム ・ 県立図書館で実施している情報リテラシープログラム ・ プログラム開発		林業士入門講座 ・ 聴衆として成果プレ発表に参加	
午後	基幹業務 ・ 選書 ・ 受入 ・ 相互貸借および遠隔貸出 ・ 信州ナレッジスクエア		アーカイブ資料の蓄積と組織化 ・ 県内のデジタルアーカイブの状況概観 ・ 書庫見学 ・ 信州デジタルコモンの今後	公共図書館のこれまでとこれから ・ 森館長とのディスカッション

3. 研修内容

今回の研修プログラムは前掲（表1）のとおりである。以降では、この研修プログラムの内容を前掲（図1）に則り「基幹業務」と「対外業務」に大別して紹介する。ただし、紹介する順はプログラムのとおりではないことをあらかじめお断りする。

3-1. 基幹業務

ここでは、主に県立図書館内部で日常的に行われている業務について取上げる。館内見学、児童図書室での業務紹介に加え、資料の選書から受入までの流れや相互貸借（以下、ILL）業務、資料の再組織化について説明を受けた。図書目録登録、およびデジタルアーカイブへの資料登録作業は、実際に体験もした。さらに、司書会議や館内レファレンス研修に同席し、業務遂行のリアルな現場を体感することができた。

3-1-1. 館内見学

筆者は、利用者として県立図書館を訪れたことは何度もあったが、職員から説明を受けつつじっくりと見学したことで、「実感ある知の循環」⁴⁾を生み出したいという県立図書館のコンセプトが随所に体现された空間となっていることに改めて気付いた。

具体的には、1階エントランスの床一面に貼られた長野県地図には、県内の地理的な距離感をわかりやすくする狙いが、同じくエントランスに設置されたストリートピアノには、従来の図書館イメージにありがちなインプットのみならず、アウトプットまで意識させる狙いがあるという。2階の一般図書室では、あえて日本十進分類法（以下、NDC）に沿って図書を配架せず6つの情報世界にゾーニングしており⁵⁾、ブラウジングによる偶然の発見を促す配架順になっている。3階の学び創造ラボの一角にある「信州情報探索ゾーン」では、部屋の中央に設置されたタッチパネルを操作したり、Oiteminfo（オイテミンフォ）⁶⁾を持ち上げて所定の場所に置いたり、利用者が自らアクションすることで情報を得られるよう工夫されていた。同じく学び創造ラボの「Co-learningゾーン」には、イベントの成果物（図2）を開催後一定期間展示しているようで、訪れるたびに風景が変わることにより利用者の目を引く効果が期待され、学び創造ラボを利用してイベントができるというアピールにもなると感じた。また、森館長によると「イベントを一過性のものにしない」ようにも意識しているとのことだった。

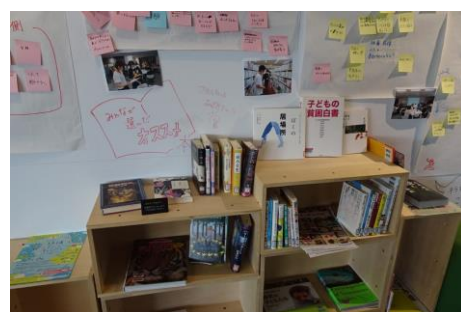


図2 イベント参加者が
選書したオススメ本

3-1-2. 児童図書室

基本コンセプト「体験・発見・やってみ!？」に基づき、調べ学習コーナーの設置、絵本や児童

図書と一般図書の混配、体験の貸出⁷⁾など、実験的な試みを積極的に行っている。図書以外のツールも分け隔てなく書架に配置され(図3)、思わぬ気づきが生まれやすい仕掛けがそこかしこに施されていることが印象的だった。かつては絵本の収集に重点を置き、公共図書館としては珍しく「おはなし会のない図書館」であったというが、2019年のリニューアルに伴い、コミュニケーションを誘発する空間へと大きく方針転換を図ったそう⁸⁾。



図3 児童図書室

特に体験の貸出では、児童図書室内で使えるボードゲームや、隣接する若里公園に持出して遊びながら学べるストライダー、双眼鏡と図鑑のセット、スピードガンなどを提供している。子どもたちが自ら探究し、「実感ある知」を手にしてほしいというコンセプトがここにも現れている。

3-1-3. 資料の選書から受入・ILL

各業務の担当者から、実感のこもった説明を受けた。大学図書館の業務と通じる部分も多いが、採用されている図書館システムや方針の違いなど、新鮮に感じることも多かった。

県立図書館ならではの特徴として、郷土資料の積極的な収集、レファレンスライブラリーとしての役割を意識した選書が挙げられる。前者に関しては、受入時に既存の目録情報に加え、資料に含まれる長野県に関する情報を一件一件追記しているとのことだった。長野県の山がどのページに載っている、著者の出身が県内のどこであるなど、「検索で引っかかる項目を少しでも増やす」との意気込みで、かなり細かく追記する。一般図書として購入した場合でも、長野県に関する情報が豊富な図書は、郷土資料として複本を購入することもあるそうだ。後者は、市町村図書館との役割の差を意識しての方針である。3-2-1.で後述する「レファレンス実習」では県立図書館が所蔵するレファレンスブックの一例(図4)を目にし、その豊富さに驚いた。また、研修に伺った7月時点では、一般書架の各分類の初めにレファレンスブックやその分類を代表する図書をまとめて配架する工夫をしており、各分類の導入の役割を果たしているようだった。

ILLについて、県立図書館の資料を貸出す制度としては、県立図書館の登録利用者が最寄りの公共図書館で資料を受取ることができる「遠隔地貸出」、公共図書館や学校へ資料を貸出す「相互貸借」、博物館や美術館など県内公共機関向けの「団体貸出」の3種類がある。相手や貸出後の活用方法によって、複雑な対応をしているような印象を受けた。県立図書館から他機関へ依頼をする際は、「利用者が何を求めているのか」を考えて一種のレファレンスのように対応しているとのことだった。現物が必要なのか、複写したいのか、内容さえわかれば良いのかなど、利用者の希望を正確に把握することの重要性は、大学図書



図4 県立図書館所蔵の
レファレンスブック

館での業務中にも感じる。最初の聞取りを誤って無駄な手順や時間を要することになった苦い経験を思い出し、常に相手に寄り添った対応を心がけたいと改めて感じた。また、ILLの依頼から資料購入に繋がることもあるそうで、複数の業務が密接に関係していることを再認識する機会となった。

3-1-4. 資料の再組織化・デジタルアーカイブ

県立図書館で資料の再組織化に力を入れ始めたのは、2015年前後のことだという。基本的に「資料を捨てない図書館」という方針は現在も変わらないが、国立国会図書館デジタルコレクションが公開されたことなどにより、利用が少なく発行年の古い資料を所蔵し続けることへの意味付けが必要になった。同じ頃、書庫から検閲本が見つかり、二つの企画展「発禁 1925-1944」⁹⁾「GIFT ; 子どもの世界が変わった時」¹⁰⁾ や、後の「信州情報探索ゾーン」に繋がったとの説明を受けた。検閲によって一部が破りとられた状態そのものを見せるなど、貸出資料ではなく展示資料として活用することにより、来館せずとも閲覧が可能になり一定の役割を終えた資料も、県立図書館の歴史を感じさせる空間づくりに貢献している。図書を博物資料的に扱うことや、その本がたどった来歴を見せることで資料に新たな価値を見出すことは、本学の大学史資料センターの活動¹¹⁾にも通じる部分があると感じた。

書庫は複層構造で地下を含めた7階建てであり、書庫の1～2階が開架部分の1階、書庫3～4階が開架2階、書庫5～6階が開架3階に相当する。地下書庫には県内発行の地方新聞(図5)やPTA母親文庫由来の資料、書庫1階には開館当時に前身の信濃図書館や長野市の書籍商・西澤喜太郎氏から譲受けた資料¹²⁾、書庫5階には郷土資料、2021年に増床された書庫6階(図6)には戦後～2000年くらいまでに受入れた資料が、そして書庫2～4階には開架部分との接続の利便性を考慮して2000年以降に受入れた利用頻度の高い資料が配架されている。2019年の開架3階部分のリニューアルに伴う休館期間を利用して一斉に図書を移動させたとのことだが、書庫を巡るだけでも県立図書館の歴史やスタンスを感じられた。

デジタルアーカイブも資料の再組織化と深い関係にあり、予算の確保やシステムの維持に苦労しつつも、コツコツと登録件数を増やしているようだ。利用の増加には「資料解説」の充実が鍵を握るが、一朝一夕にできるものではなく、少しずつでも増やしていきたいとのことだった。今回の研修では、県立図書館が運営するデジタルアーカイブである「信州デジタルコモンズ」¹³⁾に新しく登録された資料の「資料解説」(案)を作成する体験をした。「信州デジタルコモンズ」



図5 地下書庫



図6 6階書庫

に登録される資料の由来は様々で、「資料解説」の充実は簡単ではないと実感したが、非来館者へのサービス提供という面や図書館の最大の役割の一つである資料の保存という面からも、今後ますますの発展が期待される。

3-1-5. 司書会議・広報

司書会議にはMicrosoft Teamsという会議ツールを導入しており、議題は事前に参加者に共有され、議事録もリアルタイムで記録・共有することで、迅速に方針決定や情報共有がなされていた。また、年齢や職歴に関係なく、非常にフラットに話し合いが行われていることが印象的だった。

会議では図書館外での出張展示について検討されていたが、対外アピールとして、県立図書館における広報活動についても別途説明を受けた。基本的には企画係が広報を担当しているそうだが、係を超えた横断チームを作り、フットワークを軽くし、また現場の声を届けられるように工夫している。広報においてSNSでの発信は重要だが、アカウントを持たない人は閲覧できない場合もあること、主な利用者層が異なることなど、サービスにより一長一短があるため、複数の媒体を用いて対応しているとのことだった。当館で運用しているSNSはX（旧Twitter）のみであり、2023年8月以降の仕様変更に伴いアカウントを持たない人への即時的な広報の機能は失われた。今後のSNSの活用においては、研修中に県立図書館よりご提供いただいた「ソーシャルメディア活用マニュアル」（長野県広報・共創推進課作成、非公開）を参考にしたい。

3-1-6. 館内レファレンス研修

県立図書館では、毎週木曜日の開館前の約20分間、館内レファレンス研修を実施している。これはレファレンスの経験が豊富な職員を講師として、約8年前¹⁴⁾から続く取組である。様々な雇用形態や勤務年数の職員が所属する県立図書館のカウンター業務の質を保つ目的や、県内で働く司書の人材育成という目的もあるようだ。

内容はかなり実践的で、国立国会図書館の研修を参考にしている。参加者はそれぞれに割り当てられた例題のレファレンスインタビューと回答プロセスを検討し、担当回で発表する。発表者以外の参加者も事前に回答を作成し共有することで、様々なアプローチ方法を知ることができる。発表までの準備時間に制限は設けていないが、「利用者が待っている」ことを意識して取り組んでいるようだ。開館前の限られた時間を活用しているため積極的な発言が求められ、緊張感がありつつも、同じ館で働く職員同士ざっくばらんな意見交換がなされていた。

公共図書館と大学図書館との差異の一つに、レファレンスで受ける調査内容の違いがある。公共図書館は「〇〇について調べたい」などの事実に関する調査が多く、大学図書館は「△△の資料を手に入れるにはどうすればいいか」といった文献に関する調査が多いことが特徴だ。そのため、後述する公共図書館初任職員向けの「レファレンス実習」は、主に事実に関する調査のスキルを身に付けることを目的としていた。こうした研修を対外向けに実施するのみならず、日々の地道な積重ねによってスキルを磨いていることを目の当たりにし、敬意を抱いた。

3-1-7. おわりに

以上のように、基幹業務といっても非常に多岐にわたる内容の業務が日々遂行されており、様々な立場の職員が一丸となって県立図書館を支えている。また、対外業務とも切離せないものである。次に、本研修のプログラムより、対外業務について述べる。

3-2. 対外業務

ここからは、研修プログラムのうち基幹業務以外の取組について述べたい。具体的にはイベントや研修の運営、市町村図書館・公民館図書室との連携に関する業務である。

県立図書館は県行政の一組織であり、県民のみならず市町村図書館や自治体もサービス対象となる。そのため、県内各図書館や自治体との連携を図るとともに、前述のとおり郷土資料の積極的な収集やレファレンスライブラリーとしての役割を意識した選書を行っている。また、関係団体である長野県図書館協会の事務や研修講師なども担当している。

大学図書館の主たるサービス対象が学生と教職員である一方、公共図書館のサービス対象はその地域のあらゆる人々である。3-1-3. においてもILL担当職員の心がけについて言及したが、県立図書館では、多様な利用者、自治体、図書館などに関わる中で「相手が何を望んでいるのか」を起点にした発想が随所に見られた。県立図書館は、館種を超えて連携しながら、長野県や長野県の図書館界全体としての良いあり方を模索している印象であった。

3-2-1. レファレンス実習

筆者は7月5日に、県立図書館と長野県図書館協会公共図書館部会が主催する「レファレンス実習」に参加した。これは、公共図書館初任職員研修会の一環であり、県立図書館の職員が講師を務めている。レファレンスの基礎知識を身に付け、苦手意識を軽くし、利用者に寄り添ったレファレンスを実践することを目的としたものである。例年県内4ヶ所で開催されるうち、今年度第1回の会場が県立図書館であった。受講者は4,5人ずつの班に分かれ、講義を聴きグループワークを行った。受講者の経歴は様々であったが、自治体の行政職から異動してきた方や久しぶりに図書館に配属された方など、年齢を問わず図書館での勤務歴の浅い方が多かった。

まずは「知を体感する」というテーマの実習があり、資料検索のテクニックやNDCによる図書分類について学んだ。実習では各班に分類記号が隠された状態の図書が配られ、受講者はペアになってNDC10版を参照して5分間で図書2冊に分類を付与し、なぜその分類を付与したかを発表した。県立図書館の分類と異なる場合は、どのような視点からその分類となったのか、講師より解説があった。コミュニケーションを取りながら短時間で回答をまとめる必要があり、普段の目録作業よりも頭を使ったように感じた。

続いて「レファレンスを共有する」と題した講義では、各種レファレンスツールと、全国のレファレンス事例を共有するプラットフォームであるレファレンス協同データベース（以下、レファ協）が紹介された。講義中に、班内で事前課題の結果を共有した。事前課題では各受講者がレファ協で勤務先の自治体名を検索し、どこの図書館が、どのようなレファレンス事例を登録し

ているかを確認してきていた。同じ長野県内であっても、その自治体特有の質問などがあり、時間制限に慌てる場面もあるほど事例紹介は盛り上がった。レファ協の活用は、よくある質問の把握や、レファレンスの質の向上、業務の省力化に繋がると説明された。レファレンスには典拠を示すことと回答プロセスの再現性があることが求められるが、公共図書館では行政活動の可視化という観点からも、レファレンス事例の記録と公開は有用であるとのことだった。大学図書館においても、サービスの可視化は重要な視点といえるだろう。

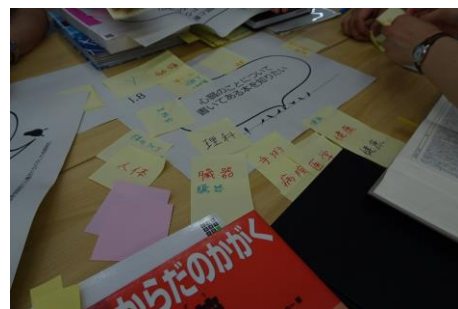


図7 レファレンス実習の様子

最後に「『人』に寄り添うレファレンス」として実践的なグループワークが行われた。このワークでは、班毎に異なる問題が二度に分けて出された。一度目は「〇〇について書かれた本を探している」のような漠然とした質問が提示され、そこから連想されるキーワードを付箋に書き出し、資料の探索を行った（図7）。二度目は、質問の補足情報として、より具体的な質問と質問者の年齢や性別、質問した背景事情などの設定が明かされた。それらを踏まえて資料を選び直し、回答を作成して発表した。なお、資料収集には蔵書検索システムを利用しないルールであった。自分たちで仮説を立て、分類を調べ、書架に足を運んで資料を集めたことで、ブラウジングによる視野の広がりを感じられた。

総括の際、講師から「レファレンスはデスクワーク、フットワーク、ネットワーク」という言葉が紹介された。机上での調査だけでなく、日常生活のあらゆる経験や人との繋がりがレファレンスに活かされる。一人では回答が困難な質問であっても、周囲の職員や他の図書館、レファ協などの力を借りることで、レファレンスの質が向上できるだろうとのことだった。

講師はレファレンスの技術を「冷蔵庫の残り物で夕食を作る」と例えていたが、限られた時間とリソースで回答を提供するためには、コミュニケーション能力や想像力、連想力が求められる。これらは一朝一夕で身に付くものではなく、日常的な情報収集やトレーニングが必要だと感じた。その点、前述のとおり県立図書館では週に一回館内レファレンス研修を行って研鑽を積んでいるようだ。

実習後には、当館でもレファ協を活用したいという話が上がり、筆者の一人は実際にレファ協の研修会に参加するなど情報収集を行っている。今後の活用に向けて、引き続き検討していきたい。この研修においても「利用者が何を求めているか」を一番に考える姿勢が徹底されており、県立図書館のビジョンが浸透している様子を感じられた。

3-2-2. 情報リテラシー教育—林業士入門講座を中心に—

研修後半では情報リテラシー教育に関する事業の紹介があり、イベントに参加する機会もあった。3-1-2. では児童図書室について触れたが、図書館は学校とは異なる学びの場である。県立図書館は、子どもや家族連れの利用が多い夏休みに、利用者の好奇心を刺激するイベントとして「ナツとしょ」¹⁵⁾ や「図書館おしごと体験」¹⁶⁾ などを開催している。これらの取組では、図

書の貸出に限らない図書館の幅広いサービスを利用者に知ってもらい、図書館に対するイメージの変化を促すことも狙っているようだ。

さて、当然のことながら、公共図書館は子どもの探究活動だけではなく全世代の学びに関わっている。大人の探究的な学びを支援する社会教育活動の一つに、県立図書館が参画する「林業士入門講座」がある。これは、長野県林業総合センターが主催する「地域林業のリーダー」を育成するための研修¹⁷⁾である。当時の講座担当者が県立図書館で良い利用体験をしたため、県立図書館に声がかかったそうだ。例年、講座の序盤から中盤頃に参画し、基本的にはレファレンス業務のようなアプローチを試みている。林業の非専門家だからこそその視点で、林業と他分野とが関わる余地や、受講者の視野を広げられるよう取組んでいるらしい。具体的な方法は毎年試行錯誤しており、今年度は若手職員が受講者とバディを組んで調査や発表準備を支援している。取りまとめ担当者の「人を相手にするものなので、絶対的な正解はない」という言葉が印象的であった。

10月26日には、県立図書館3階の学び創造ラボを主会場に、対面とオンラインで「林業士入門講座」の成果プレ発表が行われた。筆者は、前日にこれまでの経緯や図書館としての意図、実施内容を説明してもらい、当日は設営とプレ発表の観覧に加わった。

設営では、会場の機器設置のほか、Zoom配信のための画角や照明、音声等の調整を行った。特にZoomの調整は丁寧に行い、オンラインイベントのホストとなる際の接続についても確認した。近年はオンライン会議システムの利用が増えており、設営を進める中でお互いのノウハウが自然と共有されていた。

プレ発表は、講座の受講者4名がスライドを投影しながら10分程の発表を行った(図8)。ここでは、受講者が考えた林業や地域の課題について、提案と現在の活動状況が発表された。それらに対して、参加者は質問したり感想を伝えたりした。業務に関する専門的な質問や、図書館職員の参加者からは調べ物のアドバイスなどがあった。

受講者の発表からは、地域の特性を分析し、自分の強みを活かしてその土地・その人ならではの林業を模索する様子が伝わってきた。林業は森林だけを相手にするものではなく、法律・産業・歴史・文化、そして地域の人々と密接に関わりながら成り立っている。図書館が関わらない分野などないと気付かされる体験だった。県立図書館の職員は、レファレンス実習では講師であったのに対し、こちらでは伴走者ようであった。筆者は、図書館が実際の課題解決まで寄り添うのは難しいかもしれないが、行政や専門家などの紹介先を複数持つことで、それらの窓口となる可能性があると感じた。大学もその紹介先の一つとして、研究成果の公開や共同研究、リカレント教育といった形で公共図書館と知の連携が図れるのではないだろうか。



図8 林業士入門講座の様子

3-2-3. 市町村図書館・公民館図書室との連携

これまで、県立図書館は市町村図書館の支援や取りまとめ、郷土資料の収集などを担ってきた。

その一方では社会や政策の変化に伴い、市町村図書館や自治体から求められる県立図書館像について、県立図書館はその必要論にまで踏み込んで考えてきたそうだ。その過程で、市町村の図書館や自治体が望むことを知るため、市町村訪問が始まったという。3年かけて長野県内の77市町村を巡り、図書館や地域の実情を知る取組である。新型コロナウイルス感染症流行のため中断していたが、2023年度より再開した。

長野県域の理想を、連携担当者は「自治体の独自性を尊重しつつ、どこに住んでいても地域格差や情報格差がないこと」とし、そこから逆算して県立図書館としてどう機能すべきかを考えていた。理想の実現のため、各自治体や市町村図書館同士のハブになったり、伴走者としてともに課題解決を目指したりしながら、県立図書館としての役割を果たしていきたいとのことだった。

特筆すべきは、市町村と県による協働電子図書館「デジとしょ信州」¹⁸⁾である。長野県は県土が南北に長く、県立図書館はその北部に位置しているため、地理的に離れた地域へのサービス提供が課題となっている。また市町村数が全国で2番目に多く、図書館未設置の自治体もある。このような背景のもと、全県民が公平に資料にアクセスできる環境が求められてきた。デジとしょ信州によって、住む場所や生活スタイル、障がいの有無を問わない資料へのアクセスが実現しつつある。

デジとしょ信州は2022年8月にサービスを開始し、現在2年目である。今年度からは学校連携による利用者一括登録や、小中学生向けコンテンツの同時アクセス無制限サービスが始まった。選書は全県の公共図書館職員が分担して行い、様々なテーマで「コレクション」として見せている。現在も毎月行われる会議の参加率は高く、市町村と県とが高い熱量をもって取組んでいることがうかがえる。森館長からは初日と4日目に今後の見通しについてお聞きした(図9)。自治体等の出版物の電子化、地元出版社や書店への働きかけといった構想があり、前者については「信州の資料」として町村誌等の公開¹⁹⁾が実現している。さらに、電子書籍は、いつでも、どこからでもアクセスでき、文字の拡大や音声読み上げといった機能を持っている。これらの特徴を生かして、学校外(フリースクール等)の様々な居場所や、特別支援学校などでも活用していただけるよう、検討しているとのことだった。



図9 森館長とのディスカッション
(4日目)

3-2-4. おわりに

ここまで、対外業務について紹介してきた。図書館と図書館、図書館と他機関など様々な連携の可能性を感じられるプログラムであった。

レファレンス実習と林業士入門講座は、準備段階や背景についても説明を受けたことで一層理解が深まった。参加者として新たな気づきを得られただけでなく、県立図書館で行われるイベントの運営にスタッフとしても関わり、主催者側の意図や試行錯誤の様子も知ることができた。ま

た、当初の研修プログラムでは、デジとしょ信州は図書館概要説明に含まれるのみであったが、研修の合間を使い利用動向についても説明していただいた。このような柔軟な対応はぜひ見習いたいと感じた。

4. まとめ

3章にて報告したとおり、今回の交流研修では利用者層や収書方針、提供するサービスなどが大学図書館と大きく異なる公共図書館に4日間身を置くことで、様々な学びがあった。その中で、特に印象に残ったことがある。

3日目（10月25日）の司書会議において自分たちの業務を紹介したときのことである。筆者はそれぞれ、普段は異なるキャンパスで勤務しており、必ずしも業務の領域が重なるわけでもない。そのため、お互いの発表を聴くことで、それぞれの所属館での運用ルールの違いや、きちんと認識できていなかった資料の分担収集方針を知ることができ、業務をより進めやすくなった。また、当館では主任以下がお互いの情報を共有する機会は少ないため、今後、ゆるやかな集まりとして不定期にでも情報共有の機会を設けたいと感じた。

さらに、目の前の業務を進めるときに、どうしても時間・空間的に狭い視野で進めてしまいがちだが、「長期的な視野を持ってほしい」との森館長の言葉を受け、「トータルとしての長野県の図書館」の視点を持つ必要性を認識することができた。毎年続く運営費交付金の削減や近年の光熱費高騰による財政難、少子化の更なる進行など、大学の運営基盤は厳しい状況に置かれており、大学図書館職員には大学職員として「トータルとしての大学（図書館）」の視点も必要とされている。とはいえ、大学によって規模や成り立ちも異なり、各大学に固有な事情や自身の事情など、様々な条件を重ねて考えていくと、実際には所属機関の数年後を考えるのが精一杯、とこれまで筆者は感じていた。しかし今回の研修で、長期的な視野を持つこと、具体的には、未来や理想像から逆算して、いまだどのように動くべきか、と考えることの重要性に気付かされた。

これまで「図書館員の仕事は、単に図書を図書として取扱うことにあるのではなく、図書と人とを結びつけるところにある」²⁰⁾と言われてきた。現在の大学図書館職員の役割は、図書に限らず、機関リポジトリやデジタルアーカイブなどの電子的な資料や、研究者や担当部署の情報も含めた「知」と大学図書館を利用する「人」を結びつけるところにある。さらに本学は、地域との繋がりが密であることも特徴の一つであり、当館の理念・目標²¹⁾としても「地域に根ざ」すことを掲げている。今後は、本学で行われている教育・研究をどのように支えるか、そして、長野県（の図書館や住民）にどう貢献していくか、というそれぞれの視点を見失わないように、当館に蓄積された「知」を生かして日々の業務を遂行していきたい。

研修期間を通じて、各業務の担当者がそれぞれの業務内容について直接詳細に説明していただき、かなり細かい事情なども知ることができた。また、前述のとおり、今回の研修では当日の状況に合わせて一部の内容が追加された。臨機応変に対応して下さった県立図書館の職員の皆様に、改めて感謝申し上げたい。

注

- 1) 小林百合, 佃笙子, 干川優 (2024) 「信州大学附属図書館との交流研修について」『信州大学附属図書館研究』 Vol. 13, pp. 119-129
- 2) 信濃図書館は信濃教育会により開設された図書館で、明治40年6月15日の開館当時の蔵書は35,000冊だった。前身となった信濃教育会員図書縦覧所は信濃教育会員のための図書室であったが、信濃図書館は一般公衆にも公開されていた。これらの蔵書のうち書籍14,624冊、新聞雑誌996綴、および西澤喜太郎氏の寄贈図書が県立図書館の開館時に受入れられた。県立長野図書館 (1981) 「県立長野図書館五十年史」, 県立長野図書館. pp. 2-4, 11 (国立国会図書館デジタルコレクション)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12234998> (参照2024-01-10)
- 3) 県立長野図書館 (2022-10-04更新) 「沿革」
<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/info/history/> (参照2024-01-10)
- 4) 県立長野図書館 (2023-07-16更新) 「ミッション・ビジョン『共知・共創の広場』」
<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/mezasukoto/mission/> (参照2024-01-10)
- 5) 県立長野図書館 (2023-06-27更新) 「フロアマップ」
<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/guidance/floor.html> (参照2024-01-10)
- 6) 株内田洋行の情報展示機器
県立長野図書館 (2017-09-22) 「県立長野図書館 × (株) 内田洋行「知識情報ラボUCDL (ウチデル)」が始動します！」 (図書館からのお知らせ)
https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/static/osirase_170922/ (参照2024-01-10)
- 7) 県立長野図書館 (2020-02-17更新) 「体験の貸出」
<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/guidance/taiken/kashidashi.html> (参照2024-01-10)
- 8) 県立長野図書館 (2023-10-13) 「児童図書室のリニューアルから5年！」 (よむナガノ県立長野図書館ブログ)
https://blog.nagano-ken.jp/library/2023/10/13/taiken_hakken_yattemi/
(参照2024-01-10)
- 9) 県立長野図書館 (2015-08-19更新) 「発禁 1925-1944」 (よむナガノ県立長野図書館ブログ)
https://blog.nagano-ken.jp/library/plan/hakkin_1925-1944/ (参照2024-01-10)
- 10) 県立長野図書館 (2016-03-01更新) 「GIFT ; 子どもの世界が変わった時」 (よむナガノ県立長野図書館ブログ)
<https://blog.nagano-ken.jp/library/plan/gift/> (参照2024-01-10)
- 11) 信州大学大学史資料センター (2023-12-07更新) 「センターについて」
<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/#about> (参照2024-01-10)

- 12) 南陀楼綾繁 (2022-04-18) 「県立長野図書館 (後編) 奇人が図書館に託したものは【書庫拝見2】」 (シリーズ書庫拝見), 日本の古本屋.
https://www.kosho.or.jp/wppost/plg_WpPost_post.php?postid=9213 (参照2024-01-10)
- 13) 県立長野図書館 (2023-11-15更新) 「信州デジタルコモンズ」
<https://www.ro-da.jp/shinshu-dcommons/> (参照2024-01-10)
- 14) 斧澤有里, 湯本寛深 (2020) 「県立長野図書館との交流研修について」『信州大学附属図書館研究』Vol. 9, pp. 229-234
<http://hdl.handle.net/10091/00021862> (参照2024-01-10)
- 15) 県立長野図書館 (2023-09-01) 「夏休み企画「ナツとしよ2023」を開催しました!」 (よむナガノ県立長野図書館ブログ)
https://blog.nagano-ken.jp/library/2023/09/01/summerlib_202308/ (参照2024-01-10)
- 16) 県立長野図書館 (2023-08-22) 「夏休みのとある体験-図書館おしごと体験-」 (よむナガノ県立長野図書館ブログ)
https://blog.nagano-ken.jp/library/2023/08/22/librarywork_20230818/ (参照2024-01-10)
- 17) 長野県林業総合センター (2023-06-09更新) 「令和5年度林業士入門講座」
<https://www.pref.nagano.lg.jp/ringyosogo/gyoumu/yosei/ringyoshi.html>
(参照2024-01-10)
- 18) 「デジとしよ信州」
<https://shinshu-kyodo-library.overdrive.com/> (参照2024-01-10)
- 19) 「信州の資料」 (デジとしよ信州)
<https://shinshu-kyodo-library.overdrive.com/library/local-content> (参照2024-01-10)
- 20) 引用にあたって、新字新仮名遣いに表記を改めた。
中田邦造 (1933) 「公共図書館の使命」, 石川県社会教育課. p. 37 (国立国会図書館デジタルコレクション)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1119973> (参照2024-01-10)
- 21) 信州大学附属図書館 「理念・目標」
<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/philosophy.html> (参照2024-01-10)

参考文献

- 長野県 (2023-11-14更新) 「『デジとしよ信州』が全国知事会『先進政策バンク』の『令和5年度 先進政策大賞』および『デジタル・ソリューション・アワード大賞』に選定されました!」
https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/bunsho/happyou/library/231114_seisakubank.html
(参照2024-01-10)
- 内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 「長野県内全77市町村が主体となった協

働事業！市町村と県による協働電子図書館『デジとしょ信州』（デジタル田園都市国家構
想）

https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/digitaldenen/menubook/2022_summer/0066.html

（参照2024-01-10）

- 信州大学（2023-11-15）「大学の地域貢献度調査 信大は全国2位にランクイン」

<https://www.shinshu-u.ac.jp/topics/2023/11/post-469.html>（参照2024-01-10）